会議の概要（議事録）

<table>
<tr><td>会議の名称</td><td>（番号）
１−４９</td><td colspan="3">墨田区基本構想審議会　第２部会（第２回）</td></tr>
<tr><td>開催日時</td><td colspan="4">令和６年８月２９日（木）　１９：００から２１：００まで</td></tr>
<tr><td>開催場所</td><td colspan="4">墨田区役所１２階　１２３会議室</td></tr>
<tr><td>出席者数</td><td colspan="4">【委員】鈴木みゆき（部会長）、角山剛、鎌形由美子、駒村康平、庄司道子、平林秀敏、星野喜生、山口亮、山室学（計９名）
【事務局】岩佐企画経営室長、楠政策担当課長、政策担当主査（矢野、原）</td></tr>
<tr><td>会議の公開（傍聴）</td><td colspan="2">公開（傍聴できる）　部分公開（部分傍聴できる）
非公開（傍聴できない）</td><td>傍聴者数</td><td>５人</td></tr>
<tr><td>議題</td><td colspan="4">１．高齢者福祉、障害者福祉、地域福祉について</td></tr>
<tr><td>配付資料</td><td colspan="4">１．次第
２．第１回部会の振り返り【資料１】
３．基本構想検討シート【資料２】
４．こどもまんなか実行計画 2024（概要）（鈴木委員長提出資料）【資料３−①】
５．保育士の復職支援の強化について（鈴木委員長提出資料）【資料３−②】
６．「新子育て安心プラン」の後の保育提供体制について（論点）（鈴木委員長提出資料）【資料３−③】
７．ライフコース４段階区分説（角山委員提出資料）【資料４】
８．加齢と認知機能の関係（駒村委員提出資料）【資料５】
９．第２部会への情報提供（山口委員提出資料）【資料６】
１０．　墨田区基本構想審議会委員より寄せられた区の好きなところ、強みだと思う点、区の改善すべきところ、課題だと思う点（抜粋）【資料７】</td></tr>
<tr><td>会議概要</td><td colspan="4">１　自由意見
前回の部会を欠席した鈴木委員及び庄司委員より発言があった。
（鈴木委員）
本日こども家庭庁の会議で配布された公表資料を 3 点資料提供した。今回のというよりは次回に向けてということで、今、こども家庭庁がそのこどもまんなか実行計画というのを立てており、その概要を示したものである。
一番新しい資料で今月の会議、子ども子育て支援等分科会といい、実は前は内閣府にあった子ども子育て会議と呼ばれていたものが、こども家庭庁に移ってこういう名前になった資料。後ほどご高覧いただければ幸い。資料の 3−②保育士の復職支援の強化についてということで、前回の議事録を拝読させていただいたところ、角山委員から保育士の不足のことをご指摘いただいた。まさにその通りであり、潜</td></tr>
</table>

	在保育士と呼ばれていて保育士資格を持っていても、なかなか保育士として再就職してもらえないということで、様々な手を打っているが、残念ながらうまくいっていないことを示している。 　今回のテーマとも絡むが、福祉に関しては、福祉を支える人の存在というのはとても大切だと思い、保育士もそのうちの一つなのでご高覧いただければと思う。 　一方で広く見ると、墨田区はとても繋がる区として成り立ってきたところがあるので、こういう心に響く言葉というのが、この基本構想という中で、今後生かしていければいいのかなというふうに個人的に思っている。 （庄司委員） 　障害者団体連合会会長という立場だが、子どもが知的障害で、墨田区手をつなぐ親の会の会長もやっている。うちの子はダウン症で、もう 40 になる。18 歳から、元気に作業所にずっと通所していたが、このコロナの時期とかぶった令和 2 年に歩き方が変だと、すぐ転ぶ。最初は整形外科に行って、墨東病院を紹介されて、これは頚椎ヘルニアではないかという。今度は東大病院で即手術をしないと寝たきりになると言われた。手術は成功したが、歩行困難が残ってしまって家の中では歩行器で、外は車椅子で、今では生活介護って言って、デイサービスのようなところにやっと通うことができて、車椅子ごとバスに乗っけて、向こうで楽しく過ごして帰ってくるという生活になって、ほっとしたところ。 　私達のその手を繋ぐ親の会の知的障害っていうのは、皆さんの知ってるダウン症自閉症、強度行動障害って言うが、暴れん坊、何でも壊しちゃう、大まかに分けるとそのぐらい。会員も、障害をお持ちの方も、高齢化ということで、もう親は 70、80 でも会員として一緒に頑張ってきているが、私達が死んだ後、この子はどこに住むのかということで、グループホームをどんどん作ってくれということを行政に要望している。 ２　事務局からの伝達事項 　　事務局より本日のテーマ及び資料１及び２について説明を行った。 ３　審議 （１）高齢者福祉について （鈴木委員） 　資料 1 の 12 ページに関連データとして高齢者人口のエリア別のものがある。これを見ると、うめわか地区とぶんか地区の高齢化率がとても高いということがわかる。実はこのエリアというのは、防災のハザードマップを重ね合わせると、真っ赤なところになる。つまりものすごく危ない浸水被害が起こりうるところなので、高齢者の、しかも例えば独居の方が多くなったときに、どういうふうに避難をするのかというようなことを含めて、この高齢者福祉の中に防災の視点をきちんと備えないと駄目なのではないか。特に墨田区の場合は本当に危ないという、歴史的にもいろいろなことがあるので、そこを含めて考えていっていただきたいと思っている。

	（角山委員） 資料４をご覧いただくとライフコース４段階説という１枚の資料があるが、支援を必要としている高齢の方もいらっしゃる中で、のんきなこと言うなというようなお叱りを受けるかもしれないが、人生 100 年時代ということを考えてみると、現在の日本人の平均寿命が、男性が 81.09 で、女性が 87.14。7 月の厚生労働省の発表だが、まさに 100 年時代が来ているということ。それで、そういう意味では非常に高齢社会に入ってきているわけだが、高齢者の特徴というのは多様性だと思う。年齢だけではなくて、やはり心理学的に見れば適応能力とか、あるいは肉体の適応能力というようなことがあって、なかなか年齢を基準に一括りに捉えていくことが難しくなってきていると思う。 そこにご紹介したライフコース４段階説というのは、ラスレットという研究者が提唱したものだが、何歳から何歳までがどこに相当するということではなくて、人生の段階で見たときに、ファースト・エイジからフォース・エイジまで 4 段階に分けられるのでないかということで、特にこのサード・エイジが達成の時代、充実の時代ということで、ここはシニア層に相当するだろう。フォース・エイジというのは、どんどん機能が衰えてきて依存とか老衰とかやがて命を閉じるというような死の時代ということになるわけだが、特にこのサード・エイジをどういうふうに豊かにしていくのかということが、おそらく今後サクセスフルエイジングという中では、一つの大きなテーマになってくるのではないかということだと思う。どの時代、どのエイジを生きるかというのは本人の選択でもあるわけだが、社会に出て、いろいろな社会の中で、活動できる場があるかどうか、それが地域福祉ということにも絡んでくるかと思うが、いろいろなその活動をする、そういう活動を行政あるいは周囲の人たちが、その活動を理解して支援してくれているという思いを持つことができれば、心身の健康維持ということにも繋がってくるのではないかというふうに思う。 どんな方でもこのフォース・エイジに最終的には入るわけだが、このサード・エイジの段階をどれくらい、その年齢に関係なく、たとえその 70、80 になっても、自分はサード・エイジでまだ頑張っていられるんだというような、そういうサード・エイジの段階を長く続けることができるように、そういう社会が求められているのではないか、そうするとそこに行政が提供できるものも出てくるのではないかと。それが例えば墨田区サード・エイジ大学とか、何か例えば立教大学なんかではセカンド・ステージ大学ということで、シニアの方たちが再度勉強する場を設けている。今もあるかもしれないが、墨田区でもサード・エイジを充実させていくための、そういう何かうまい仕掛けができれば、高齢化あるいはその福祉ということでも、変な言い方だが、お金の節約にもなるのかもしれないというふうに思っている。シニアがサード・エイジを伸ばしてしまうと、若年層とか中堅の方たちの活躍の場を奪うことにもなるかもしれないなど、いろいろな問題もあると思うが、やはり共存しながら、進めていくということ、その中に幸せな合意というか、サクセスフルエイジングというようなことが生まれてくるのではないかというふうに思っている。一つのご紹介だが、こういった４段階の中で３段階目を充実させていくというような、そういう考え方で福祉というものを考えてよいのではないかなということでご紹介した。

	（鈴木委員） 主体的にサード・エイジを生きるということがすごく大事だと感じた。 （駒村委員） 資料を用意させていただいた。下段の方に、角山委員から寿命の話あったが、平均寿命は 82 歳とか 88 歳とか来ているが、2020 年で亡くなった人を若いうちから並べていってちょうど真ん中にくるその年齢は、男性 85、女性 91 という状態になってきている。最も亡くなった年齢が多い人では、男性 89、女性 93 という状態。もう人生 90 歳時代はもう来ていると、平均寿命が低くなるのは、若いうちに亡くなる方がいるので、こういう分布になっている。中高年の方はもう 75 歳以降、15 年から 20 年あるというつもりで準備しなくてはいけない。年齢とともに記憶力とか認知機能が落ちるのは誰もがある。名前が出てこないとかは当たり前の話。同時に複数の仕事が苦手になるとか、今までできたこと、わかったことが、なかなかわかりづらくなることは当たり前に誰もが起きるので心配することはない。40 代半ばからそういうふうになっていく。一方、一般の言葉が出てこないとか、よく知ってるところで道に迷うとか、こういうことになってくると少し病的な可能性もあるということで心配しなければいけない。 次のページは、東京都健康長寿医療センターの粟田先生が発表された認知症かあるいは軽度認知障害どちらかになっている確率。皆さんが思っているほどと比べて確率はどうか。85 歳を超えると、80 から 100%の人がどちらかになっているということ。つまり、ならない方が珍しいということ。誰もが認知症になっておかしくないし、なっても困らない社会を考えておかなければいけない。 認知症がだんだん進んでいくと、いろいろできないことが増えていくが、初期の段階であれば普通に過ごせる。軽度認知障害は、日々の生活にはほとんど影響がないので心配しなくてもいい。ただ困ることは買い物とか、お金の管理が真っ先にできなくなるので、特殊詐欺とか消費者問題とか投資詐欺とか、こういった問題が増えてくる。今、日本だけでなく世界中で問題になっているのは、この認知機能が低下した人を標的にして徹底的に狙ってくるビジネスの存在もある。インターネット上でもたくさん増えているので、単発の事件でなくて社会問題になってきているという認識をしておかなければいけない。金がないから投資詐欺なんか引っ掛からないと思っていたら大間違いで、家を持っていたらリースバックという方法で得するように思わせて、家を売らせてしまう。これが広がっていて、電話をしたり会ったりして、相手の認知機能を憶測しながら、この人はいけると思ったら徹底的にそこを攻撃する。 従って軽度認知障害でも、在宅で暮らしていれば、経済活動で危ないものもあるし、お金の管理も難しくなる。軽度も含めて認知症が今どのぐらいいるかというと、1000 万人。だから墨田区で軽度認知障害、認知症の方がどのくらいいるのかというと大体高齢者の 3 分の 1 ぐらいはいると考えた方がいい。標準平均で考えるとそのぐらいはいる。ちなみに認知症の方の持っている金融資産は 200 兆円。従って悪い人たちが狙うのは無理もないと思う。 この認知機能の低下というのはどうやって起きていくのかが次のページであり、これは典型的なアルツハイマー型認知症のパターン。一番日本で多い。まず左から、

	赤い線で、認知機能が徐々に落ちていく。自分の認知機能が落ちていることは最初のうちは気がつく。忘れっぽくなったと、言葉がすぐ出ないなと。それは青い点線が自分で把握できている認知機能の状態。 ところが、途中から認知機能の主観的な評価が上がっていくのがわかる。これどういうことかというと、認知症が進んでいくと自分が認知症になっていることは自分でわからなくなると、自認ができなくなるという非常に困った問題がある。したがって、特殊詐欺で騙される。ATM はまだ動かせるけど、言っていること自体はよく理解できていないというようなことになると、この ATM で騙されるというようなことも起きる。実際にあったのだが、普段 50 万円の補聴器が今日に限って 25 万円だから買わないって言われたと言って、思わず買いそうになったことが身近な親族でもあった。特殊詐欺に至らなくても、似たようなビジネスモデルがそこら中にある。やはり墨田と言う社会を、認知機能が落ちても、安心して暮らせる社会にしなければいけない。仮に認知機能が下がってもそれをカミングアウトしても、安心して生活できる社会を目指す。夢を語るならば、そういう社会を作っていくべきだと思う。ちなみに墨田の場合、高齢者があまり自動車の運転をすることはないと思うが、資料下段はどういう意味かというと、横軸に年齢、縦軸に車の運転は得意ですかという青い線。高齢になればなるほど、車の運転が得意だというふうに答え、そして高齢になればなるほど車で危ない思いをしたことがないというふうに言う。つまり高齢期になると自信過剰という問題が出てきて、自分の良さを客観的に見れなくなってしまうので、これはこれで危ない部分がある。ちゃんと周りの人が普段から付き合って信頼関係のある人たちを作って、諫めるときにはちゃんと諫めなければいけない。もちろん車を取り上げてしまったらいいのかというわけでなくて、ちゃんと日々の生活に困らないようにサポートしてあげる必要がある。先ほどの区の重層的支援体制整備事業の絵は、国もこういう絵だが、実は重層的支援体制整備事業とは社会福祉法の 1 個の事業だが、社会福祉法にはどう書いてあるかというと、地域住民や地域の企業も一緒に地域社会を作っていくということ。事務局の説明では福祉の関係者ばかり出ているわけだが、例えば自分が今、墨田区と一緒にやっているのは、お金の見守り、資産の見守りを東京東信用金庫と墨田区と地域包括と連携して、こういう高齢者の方が来たらちゃんと支えようということをやっている。銀行、信金、薬局、コンビニ、不動産屋とか、こういうところで認知機能が下がった人が見つかるので、こういう方をちゃんと福祉連携するような仕組みを作っていくならば、重層的支援体制に入ってくるのは福祉の関係者とか公的機関だけでなくて、民間企業もちゃんと位置づけないといけない。公的機関で全部できるという時代ではもうないということを我々は自覚しなければいけないと思う。 （鎌形委員） 　私は墨田区についての感覚をお話したいと思うが、駒村委員がおっしゃったような認知症の方は、本当に増えている。コロナのときに会っていないせいもあるかもしれないが、数的に増えているなという感覚が民生委員から見るとある。 　ただ、一般の方にも認知症に少し理解が出てきて、周りに多くいるので、慣れてきて、認知症の方を助けるようになってきた。本格的に、家に入ってまで助けると

	いうのではなくて、道を不安げに歩いていると、あの方は確か軽度の認知症だったなと思うと、大して親しくなくても家まで送ってあげるとか、民生委員のところに、さっきウロウロしていたけど心配という通報があるとか、そのようなことがだいぶ増えてきたなというふうに思う。 　それをどのように上手に区全体に広げるかなというのが、駒村委員がおっしゃったように、公的なことではどうしても行き届かないし、重層的な支援と言うけれども、民生委員は元々ジャンルに関係なく動いているので、以前だとこれはもう包括ではなくて、別のところ、例えば教育委員会とかに話をしないと駄目かなというところもあった。全国的に、民生委員は包括と一番密にしている。意思がすぐ通じるのは包括だが、その他のところも、「重層的支援」が広く言われるようになってからは、以前と比べるとだいぶ問題意識を持ってきて、繋がりやすくなってきた。 　そういう意味では、墨田区は他と比べるとやはり小さい区なので繋がりやすい、そう簡単なものではないけれども、繋がりやすくできるのではないかというふうに思っている。 　民生委員が１人の高齢者の問題に関わると、ヤングケアラーなども含めて、いろいろな問題に行き当たる。重層的支援は始まったばかりで、民生委員全体に情報が行き渡っているかというと、どこの課に相談すればいいかというところまでにはまだ十分に至ってないので、民生委員にもきちんと浸透させたい。 　民生委員は高齢者担当だというふうに思われがちだが、そうではなくて困っている方全員が対象。民生委員のところに相談に来て、高齢者でないことは他へ行ってくださいとかそういうことはない。せっかくたくさん民生委員がいて、重要なポイントにいるので、民生委員自身がよく理解して、いろいろな関係機関に繋げるような働きをしていくようになればと思う。ただ、先ほどの話に戻るが、やはりなり手不足が深刻。どこの業界って言い方も変だが、同じと思って心配しているところ。 （庄司委員） 　私の場合は自分の母と同居していまして、6 年前に 89 で亡くなったが、認知症ではなかったが、であれば私もぼけないのかなと思うが、そういうことはないのか。 （駒村委員） 　認知予備能という能力があって、アルツハイマー病になってもアルツハイマー型認知症にならないケースがある。つまりアミロイドβというタンパク質にいろいろ溜まっても、それが困った症状を引き起こさないで、認知症の行動に繋がらない方がいる。普段から社会活動されている方は大丈夫という研究がある。一方、孤独になると危ない。 （庄司委員） 　手をつなぐ親の会では障害のある方３人と、保護者を含むスタッフ７名で生涯学習センターの１階のレストランを運営している。常連さんで、高齢の方で毎日来て 3、4 時間、同じメンバーでいらっしゃる方がいる。こういうレストランだけど、高齢者の方楽しみに、みんなと会えるしお喋りもできるし、涼しいし、利用してもらっていると普段から感じている。長く居てごめんなさいとおっしゃるが、なるべ

	くお店にいてくださいというふうに伝えている。 （星野委員） 　先ほど鈴木部会長の方から、鐘ヶ淵の方は高齢者率が高いという発言があったが、なぜ高いかというと、そこは全体として、都営住宅というか防災団地があった。だからある意味一番有名なところ。それで家賃も民間と比べれば安い。今では区の中で、ちょっとしたアパートとかも全部壊されて、そこに立派なマンションが出来上がったら、高齢者はもうそこに住めない。そうなるとやはり、区とか都が建てている住宅の安いところにやはりどうしても行かないと、もう生活できない状況がある。いろんな対策を打つが、まだまだ今のペースからいったら、立ち遅れがあると思う。だから本当に安心して暮らせるように、区がもっとそういうところに手を届かす。例えば区営住宅もあまり聞いたことないけど、そういうことも含めて、もっと光を当ててもらえればいいと思っている。 （平林委員） 　まず現在の高齢者の 75 歳以上という形になると、一つがやはり高齢者の方たちが適切なサービスをしっかりと把握できるような、その情報をしっかり把握できるような仕組みみたいなものができてくるといい。例えば先ほど金銭管理の話があったが、日常生活自立支援事業だとか、成年後見制度とか、そういうような仕組みをしっかりといろんな高齢者の方が把握できるような、そういう情報を収集する手段。墨田区は頑張っていて、いろいろ区報とか見たりするが、非常にわかりやすい情報発信をしているというふうに思う。そういう情報発信みたいなところをしっかりとやっていく、しっかりとしたケアのサービスを届けられる、必要なサービスに繋がって必要な情報が届くようなそういう仕組みができるといい。 　あと 15 年すると、今 60 歳ぐらいの方たちが、後期高齢者に入ってくる。今 60 代ぐらいの方たちは普通に仕事をしていて、パソコンとかそういうものがあるが、今の 75 歳はどちらかというと紙媒体が主流かもしれない。だんだんとデジタル媒体のところで情報を入手することは別に苦ではないような方たちが高齢者になってくるので、そういうところを考えると今後、やはり地域の民間企業だとかそういう方たちと連携、協働しながら、いろんなところでデジタルとかそういう技術を活用していく必要がある。例えば町会会館とかを予約するとなると、もしかしたら今、町会会館行って空き状況を確認してアナログな感じで行っているかもしれない。行政の施設を予約する時は、そういうシステムとかで予約しているところがあるが、それが当たり前になって、そういう世代の方たちが高齢者に入ってくると、町会会館の予約とかも、もしかしたらスマホで検索するとわかるような、そういうことが今後求められる形になる。世代交代でないが、今の若い世代の方たちが町会に入って活動しやすいような準備みたいなものも、この 15 年のうちにやっていくことも必要と考えている。 　中学校 PTA 連合会からの委員としての立場から申し上げると、地域の担い手というところで、高齢者の方が受け手でなくて担い手というところで活躍できるような仕掛けが地域の中にあるとやはりいい。今、放課後子ども教室を PTA のお母さんたちが見ているというところがあるが、その見守りを地域の高齢者の方に見直したら

	どうかというところで仕掛けてみた。しかし、PTAのお母さんたちに地域の高齢者はどうかと聞いても、PTA内で既に関係ができているため、新たな関係作りが面倒くさいみたいな、そういう感じになってしまった。PTAの人たちは日中仕事している方たちばかりなので、地域の方たちに子どもたちの面倒を見てもらう形になると、親の方が助かるはずなのに、関係を作るのが大変だというところから拒否してしまうところがあったりとかするので、若い世代の方たちが、地域の方との接点を持つことが別に苦でないような、そういう意識の醸成みたいなものも少しずつできてくるといい。子どもたちと高齢者の方たちが接して、高齢者の方が見守りすると、やはりそれが自分の役割というところにもなる。地域の子供たちが単に遊んでいるところにいればいいので、そこにサロン活動みたいな冷蔵庫なんか置いておいて、そこでお茶を飲みながら子どもたちの様子を見るのでいいと話をしたが、なかなか理解してもらえるところではない。若い世代の方たちが高齢者の方を受け入れられるような認識が醸成できてくるといいというふうに考えている。 （山室委員） 角山委員が作っていただいた資料４で、ライフコースの４段階、フォース・エイジの人たちが依存、老衰、死の時代。多分ここが一番医療費、介護の費用もかかる年代だと思うが、最後はやはり死の問題。最終段階はどうやって医療とかを受けるかどうかが大事で、人生会議というか、ACP（アドバンス・ケア・プランニング）、もっと年齢が進む前から考えていっていただきたいなと思う。 あと例えば在宅でもかなり認知症が進んだ状態で、寝たきりの人たちが何かちょっとお腹が痛いとかそういうのがあって、そういうときにすぐ救急車となると、今救急車が足りない。その辺はある程度医療的措置をしていいのかどうかの判断という考えをあらかじめ作っていただいて家族に伝えておいてほしい。 あと認知症が進み、認知症の方がたくさんいて、包括支援センターが最初に支援すると思うが、今東京都では認知症サポート医という認知症に詳しい先生に、包括を担当させるオレンジドクターという制度が今年度から始まっている。そういうものをしっかりと作っていかないといけないかなと思う。 （鈴木委員） ありがとうございます。オレンジドクターというのは墨田区にもいるか。 （山室委員） これから登録するところ。包括に何人かいるような形になるといいのではと思っている。 （山口委員） 私の家の周りの高齢者はみんな仲良し。毎日昼間から動いていて、家の前の空き地を耕して畑にしたりしているが、みんな結構元気なお年寄りばかりだなと思っている。 ただやはり、その繋がりを持てない人というのはいると思うので、そこは一番の問題なのかなと思う。

	最近地域のイベントに行くと、高齢の男性が混ざっていて、彼らは大体定年したけれども、地域と繋がりを持てないので、奥さんに言われてきましたみたい人が多い。やはりそういう、これから趣味を探したいみたいな人がたくさんいる。全国的な問題になっていると思うが、男性側にはそういう人がたくさんいると思っていて、何かそういう入口作りをしてあげることは必要なのかなという気がしている。 墨田は特に北側の方は自治会がすごく機能していると思うので、見守り的なことで言うと、一番地域のことが分かっているのは自治会だと思う。そこで情報共有をもっとできないのかと思っていて、今、個人情報の問題でどうしても他の団体と共有するのに壁が生まれてしまうので、そこを何か行政の力とかでうまく共有できるようになっていくといいと思う。すぐに医療に繋がったり、そういうNPOとかと繋がったりすることはできるのではないかと思う。後でまた障害者のところで話すと思うが、やはり一番仲良くなることが重要だと思っている。活動仲間で銭湯の番台をやっている大学生がいるが、お客さんのおばあちゃんとご飯食べたりする。おばあちゃんとかが呼んでみんなでご飯食べよう、おごってあげるわよというと、多分行く大学生たくさんいると思うので、そうやって地域の繋がりを作っていくことから始めるのがいいのかなとは思っている。 あと話が飛ぶが、数日前にここでやっていた出前授業、授業をコーディネートしている、そのネットワークのフォーラムがあって、そこの資料を見たら、一番人気の講座は認知症の講座。今は小学校とかのカリキュラムにも認知症の学習が入っている。認知症などについて、教えなければいけないことになっているらしくて、でも私たちの世代の方が逆に認知症の知識全然持ってないなと思っている。そういうところで小学生とかと一緒に学ぶ機会を作れないのかと思っていて、そういう学びの機会とかをもっと認知症に不安を抱えるこのぐらい世代から一緒に学ぶ機会を持てたらいいのではと思っている。 （鈴木委員） 様々なご意見をいただいたが、ご質問や意見はあるか。 （駒村委員） 個人情報の問題はちょうど今、内閣府で私も議論しているが役所も困っている。先ほど防災との連携の話もあったが、いざとなったときにどこにどういう方がいらっしゃるのかというのが、本当に即座に把握できるのかというと、できていない。これは墨田区だけで法律違反をするわけにいかないので、国の方に要望を出していただかないと、個人情報は守ったけど財産、生命はなくなりましたみたいな話になりかねないだろうなと思う。 あとは、デジタルツールは使ってもらわなければいけないもので、QR コードとかでいろんなものの情報が普通に出ている。ただ高齢の方が自分で使うのは厄介なので、使い方を学びたがる。これは船橋市なんかでは、デジタルツールの講習を図書館で行っていて、いつでも好きなときに高齢者が図書館に行って、デジタルツールを教えてもらえる。それからインターフェースをちゃんと工夫しないとレスキュー詐欺みたいなものが横行しているから、使えるが変なところに行ってしまうということはあると思う。

	もう 1 個は、75 歳からデジタルツールを使い始めて、使い始めた頃はいいが、自分が認知症になってくると使えなくなるということは研究でわかってきているので、一生使えるわけではないということも考えておかなければいけない。 あと提案としては、人間が老いを感じるときはどういうときなのかという話だが、主観年齢という概念があって、今自分が何歳だと思っているかと、何歳でありたいかというのがある。30 歳までは自分の年齢より上に思いたい、早く大人になりたいと、30 超えると今の年齢よりも若く思いたいという傾向があることがわかっている。やや幅はあるが、これは世界中同じ現象。この主観年齢が中高年で若ければ若い人ほど幸福度が高くて活動的で、社会貢献もするということ。したがって、暦年齢で高齢化社会だが、墨田区は暦年齢で考えないで、主観年齢で考えると高齢化率はまだ 5%ぐらいというような感じでアピールできるのではないか。墨田は、主観年齢を若く感じられるようなまちにするというのもいいのかなと思う。ただ、主観年齢が急に上がる瞬間がある。年齢で差別されたり、身近な人、配偶者がなくなったり、あるいは転職のときに 60 歳過ぎて新しい仕事を見つけようと思ったら、とんでもない悪い条件を提示されて、60 歳を超えたら突如給料が 3 割切られたとか、管理職全部クビだとか、こんな条件しかないというと、その瞬間に、やはり自分が思っているよりも周りの評価が低いと感じた瞬間にやっぱりドンと主観年齢が上がって、俺はもう社会で必要とされないんだと思ってしまう。他方で、主観年齢が若すぎるのも実は問題だとされていて、自己評価が高いと騙されやすくなるとか、車運転してしまうとか、過剰に若すぎる主観年齢も問題。それでも暦年齢よりも若いつまり気持ちが若いということは大事な概念。生物年齢が若い人は主観年齢でも若い、身体の調子がいい人は主観年齢も若いので、暦年齢で人を差別しない社会にすべき。主観年齢が若い地域を作ろうとなると、多分日本で初めてだと思う。主観年齢でいろいろサービスを考えたり、それから基本的に年齢なんて聞かないと、「あなたは何歳か？」と言ったら主観年齢を答えていいとか。 （鈴木委員） 今回の高齢者のお話の中でまとめさせていただくと、山口委員が入口作りとおっしゃって、その入口作りが角山委員のお話のサード・エイジ大学に繋がっていくというのを思った。地域の中で主観年齢を若くする学びを構築していくということが高齢者の第一歩として、墨田区にあったらいいのかなというふうに思った。 （山口委員） 墨田区で結構前からの市民後見人の育成をやっていると思うが、そこの成果は何かデータ化されてるか。市民後見人が増えることで、どう良くなったのかみたいなことがあんまり明確にはわからないなと思っている。 （事務局） 行政の把握する成果としては市民後見人が何人増えましたという数字のところまで。おそらく山口委員がおっしゃっているのは、後見人が増えたことで、どれだけ権利が守られたかというものかと思うが、そこは具体的なデータとして把握できるものがないというのが現状。

	（鎌形委員） 　先ほど山口委員が認知症のことをあまりご存知じゃないとおっしゃっていたが、包括で認知症の教室みたいなことを、どこに関してでもやっていて、学校にも行っている。今のお話聞いていたら、宣伝不足というふうに思った。 　認知症は入口が大切で、やはりこのように家族がそうなったとき、近所の人がなったときに対応してあげると進み方も遅くなるというのもあるので、ぜひ活発に区の中で動いている方にはみんな聞いていただいてご利用いただきたいというふうに思った。 （山口委員） 　言われて思い出した。確かに回覧で回ってきている。回ってきているけど、やはりあれを見ると自分とは無関係だなと思う自分がいるので、何か小学生とかみんなが知っているみたいな記載があると、そうかというふうになる気がした。 （鈴木委員） 　次の議題、二つ目は障害者福祉ということでご意見をいただきたい。 （角山委員） 　障害者といったときに肉体的な障害とそれから精神的な障害というのがあると思う。私が過去に個人的に相談を受けた事例で、双極性障害を患い、躁鬱を繰り返していて、会社勤めだったが、会社の方でもそういうことを認めてもらって、そして一応休みを取れたり、ある程度の配慮をしてもらったんだけど結局やめてしまった。それでそうなったのは結局親のせいだということで、今度は暴力、もう 40 過ぎた男性だったが、家庭内暴力が始まって、それで包丁を持ち出して親を追いかけたりというようなことがあった。結局その親は自宅にいられなくなって、逃げ出して、行政の方に頼ってアパートを借りてもらった。そんな相談を親の方から受けたことがあるけれども、ただ私も素人なので、専門家を紹介することしかできなかったが、そのときに感じたのは、現実に起きていることが福祉という枠に入ってこない、むしろその警察に頼るしかない。親の方からすると、警察に逃げ込んで、そして子どもの方を押さえてもらうしかないんだというような、そこまで追い詰められていた。 　この場合に福祉ということで、役所に相談に行っても、それは限界があって、どうしてもその先というのは自分たちでやってくれというようなことになっていて、行政がやっている福祉の範囲から、はみ出してしまう。そういったいわゆる障害者福祉といったときに、一般に考えられている福祉の範疇になかなか入ってこないと言うか、そういう例も結構あるのかなということで、障害者福祉というのは、どういうふうに考えたらいいのかは、私自身、正直申し上げてわからない。 　また知り合いで軽度の発達遅滞のお子さんがいるが、その場合には福祉の中で、うまくそのケアをしていただけるようになっていて、グループホームの中で、子どもも非常に満足してやっている、親も満足というか、非常に安心している。 　そういうものがある中で、一方ではなかなかそこに入ってくれないような事例と

	いうのがあって、障害者福祉という中でどういうふうに考えていったらいいのか。最初に紹介したのも障害者手帳を持っている。障害者だというふうに本人は言うわけだけれども、それが時として、親の方に向いていくと。親だけでなく周りにも何か迷惑をかけているのかもしれない。どういうふうにこういう事例を捉えていったらいいのかというのがわからないままに今来ている。 （駒村委員） 　一つは実際私が関わったケース、発達障害を持っている子どもたちが歯医者行くとか、あるいは髪の毛を切ってもらう時とかになかなか受け入れてもらえないということは、やはり問題になっている。大人でも歯医者なんかは怖いから、発達障害を持っている子どもは怖がって治療ができない。髪の毛も、子どもが寝ている間に親が切ってしまうとか、子どもにとってもショックなことがある。実は京都の方で、会社側がこういうふうにやれば、発達障害のある子どもたちも、ちゃんとそういうサービスを受けられるというノウハウを教える、そういう仕組みが開発されている。これを理髪業とか関係者の方に勉強してもらいたいと思っている。当時、厚生労働省の障害者部会の部会長をやっていたので、国に交渉したが、理髪業の資格試験は県知事が決めるものという話で、東京都に交渉しようと思ったが、資格試験が改定され、テキストが変わったばっかりで、そういうノウハウが届かなかったが、そういう取組が現にある。発達障害を持った子どもたちに対して合理的配慮の話が当然出てくるけれども、もう少しポジティブな意味で、困ったら何かしてあげるのではなくて、そういう発達障害のある子どもに寄り添ったノウハウが確立されているので、もう少し踏み込んで、合理的配慮みたいなものを民間も学んでいく必要があるのではないか。 　それから社会的養護施設の子どもたちも、障害を持った子どもたちが増えてきている。その過程で虐待を受けているということも、ちゃんと把握しておかなければいけない。その子どもたちが社会に出るときに、そこは考えておかなければいけないテーマかなと思う 　それから所得補償で、先ほど親なき後の話というのは、やっぱり大きな問題になっていて、これは心身障害者扶養共済制度というのがある。 　今日は、あまり話しないが、年金の給付水準の見直しの可能性があり、障害年金も対象になりうる。障害基礎年金だけでは、やはり心配なわけで、この共済制度の保険料は税制上の優遇もある制度だが、あまり知られていない。本当は自治体がちゃんと普及しなければいけない。 　それから障害者の雇用制度、これは区ではできる範囲も限られていると思う。公共調達のときに優先順位をつけるみたいなこともあるかもしれないが、気をつけなければいけないのは、農福連携と称して実態に課題がある取り組みも増えている。一見、野菜の栽培のような事業を行い、そこで障害者雇用したふりをするみたいなビジネスが増えてきている。不用意にも飛びついている自治体がいくつかある。 　行政の方も本物と偽物の、その目利きは常に持っていただきたいと思う。 （鎌形委員） 　障害の問題はとても難しくて、外には知られたくないという親御さんも多い。例

	えば身体的な障害だと車椅子に乗っているとか、通っているところを見ていたりするとわかるけれども、そうでないところは、なかなか皆さんおっしゃらないので、民生委員が知るのは、災害と一緒になった要支援者の名簿で大体は高齢者だけれども、そこにやっぱり障害者の方の名前が出てきて初めて知るというようなことが多い。個人情報なので、守秘義務がある。町会と本当は共有しないと、いざというときに助けられない。どこの家にどういう方がいるというのはわからないので、その辺がやっぱり一番難しい問題かなと思う。以前、自立支援協議会というので、委員長をやらせていただいた。司会を行うので、具体的な話などについて、知らないことなのでとても厳しいことというふうにコメントして、次の方に振ろうとしたら、これって厳しいことというぐらいの軽い言葉で受けてもらいたくないと言われた。申し訳ないとは思うけれども、それ以上の知識もないし、踏み込めなかった。 　その後、その方といろいろあって、とても大変だとそれはわかっていても、やはり当事者でないとなかなかわからないということが多くて、福祉関係の中でも何か踏み込みにくい。 （庄司委員） 　今、鎌形委員がおっしゃったように、やはり家族の中に障害をお持ちの方がいないと、いろんなことはわからない。高齢者は必ずいるし、いずれ自分もなる。だけど障害はちょっと理解が難しい。それでも墨田区の福祉保健部の方でいろいろと啓発活動とかしていただいて、昔に比べれば、障害を持っていても、偏見の目で見られることは少なくはなったと思うが、やはり人間は自分よりも下を見ると、優越感というか、そういう気持ちはみんな誰もが持っていることだろうと思っている。 　パラリンピックが昨日から始まったけど、そもそも私はパラリンピックと普通のオリンピックが分かれていることが差別のような気がして仕方がなくて、でもある日、障害を持って、途中で障害者になった方々が、どん底の気持ちでいるときに、そうやって活躍できる場を見つけて頑張ってやっている姿は涙がでそうになる。 　あと NHK の特集で、7 月に行き場のない障害者という特集をたまたま見ていた。NHK と専門家で独自に障害者のグループホームがどうなっているかということを調査していた。グループホームに住んでいる障害の方は、軽度、割と自分のことは自分でできる方が多い。うちの子もそうだが、手のかかるお子さんのグループホームというのは、墨田区は二つある。重度の方を見るスキルがないとお世話できない、人手が足りないとか言って、うちでは受けられないと断られることが多い。この NHK の放送で都道府県、市町村、23 区を対象にアンケートをとった結果、重度なグループホームの将来の利用を希望する方が 2 万 2000 人で、これは氷山の一角であるという研究発表をしている。 　それから 2 週間後の NHK で見たが、武見厚生労働大臣の会見で、「重度の知的障害のある人が、地域の入所施設やグループホームに空きがなくて、親の高齢化に伴い、住まいに不安を抱えていることは望ましいことではない。障害のある方が地域で安心して生活が送れるようにしていくことが重要である。待機者について、各自治体での待機者の定員把握の状況について調査を進めていくことを検討していく。国としても、待機者の実態調査のために準備を進める考えを示した。」との発言があった。

	たまたま去年、墨田区への要望の中で、グループホームたくさん作ってください、入所施設を作ってくださいという、同じようなことを要望した。 要望に対して、ニーズ調査それから研究をしていくという回答があったので、とても期待している。 （星野委員） その人の育ってきた環境やその重症度によっても、100 人いれば 100 通りやり方があると、これだという方法はないというぐらい難しい問題と思う。周りで支援体制がどれだけできるのかが本当大事なことというのが聞いていて感じた。やはり親御さんが隠すのではなくて、周りの人にうちはこういうことなのでよろしく頼むというふうに言っておくと、かえっていいということらしいが、地域に支えてもらうということが大事なことなのではないかと思う。 （平林委員） まず小学校とかで今当たり前のように特別支援級の子と通常級の子の、交流みたいなものがあるというところで、自分たちが子どものときよりも、今の子どもたちはその障害を持っている子との接し方は本当にナチュラルになってきているというところがあったりするので、お互い認め合えるような、意識の醸成みたいなものをやっぱりこのまま若いうちからやっていっていただけるといいのかなというふうな思いでいる。自分も大学生から社会人ちょっと入ってまで、障害児の体操教室みたいなものをボランティアでやってきたところもあるけれども、やっぱり親への支援。あのとき自分がやっていたのは、やっぱり見ているとずっと親が付きっきりなので、体操している間はお母さんたち喫茶店来てもいいというふうにした。やっぱり障害を抱えているお母さんたちが一時でも離れられるような、リフレッシュできるようなそういう環境みたいなものがやっぱりあるといいなと思う。 三つ目が高齢者にも通じるが、支援をしてくれる方への支援。今、担い手が足りないとか、福祉職が少ないとかってあるけれども、そういう福祉職の方たちが本当に誇りをもって仕事ができるような形で、支援者への支援体制みたいなものをしっかりと構築するというところも必要なのかなと感じた。 （山室委員） 障害者の方で、お宅に行って訪問診療やっている人が 1 人いる。脳性麻痺で寝たきりなので、両親が面倒をみている。サービスについて普通高齢者の場合はケアマネージャーがいるが、障害者の場合は多分障害者福祉課でケアについて検討して、どういったサービスをやるかというのは決めていると思うが、私とその子の障害者育成のケアを決めるところの連携がなかなかうまくいっていないと思っていて、ケアマネージャーと主治医って大体連絡が来るが、それがないというのが一つある。両親も 80 代になっているので、今後はおそらく施設に行かないと無理かなと思う。 あともう一つは、保育園の園医をやっているが、やはり発達障害というか、落ち着かない子どもがいる。誰か支援していけば、発達が遅いだけで、だんだんと正常になる子もかなりいるのではと思う。そこを何とかして、就学時前からケアをしていくと、例えば不登校になったりとか、そういうことが防げるのではないかなと思

	う。 （山口委員） 障害もいろいろと分かれているけれども、一緒に居場所の活動をしている人が、左腕が肘までしかない障害者だが、子どもの頃いじめられたという。今も墨田の学校にサポートで入っているが、やっぱり今の子どもたちにも、嫌なことを言う子はやっぱりいるらしい。令和の時代に、まだそんな感じなんだと、不思議でならない。 身体障害者はもちろん目に見える障害だが、目に見えない障害も含めてやっぱり異質なものを排除するという傾向がどうしてもあるのかなと思っていて、それはやはり自分が慣れていなくて知らない世界だからだと思う。 その人は、パラリンピックの元選手で水泳をやっていた。水泳はいろんな障害者がいる。肢体不自由もいれば、視覚障害もいれば、知的障害もいるみたいな感じで、いろんな障害が混ざっていて、その人は子どもの頃からいろんな障害者を見て育った。そうすると、知的障害者との付き合いもわかるし、視覚障害者との付き合いも分かる。 昔、聴覚障害者と一緒に活動していて映画祭立ち上げて活動していたが、その頃の聴覚障害者の知り合いはたくさんいたが、彼らは他の障害には何も関心持たない。要するに障害者であっても隣の障害者に関心を持たない。そのぐらいやっぱり人間って視野が狭い生き物だなと思っている。やっぱり子どもの頃から自然にそういういろんな障害者と触れ合う機会があれば多分それが当たり前になっていくと思う。そうでなくて分離された社会で生きていくと、多分隣にいるちょっと異質な人たちは自分とは違う人たちって多分なってしまうのではないかなと思っていて、だからやっぱりそういうごちゃまぜの社会を作るというのが一つ重要なのかなと思っている。 あと資料 6 の方に京島モデルと書いているが、前回も少しお話した、テンギョウ・クラというアーティストと、後藤さんという墨田向島 EXPO というアートフェスをやっていて京島の古い長屋とかの維持保存の活動をしている人で、この 2 人が一緒に京島モデルという福祉モデルを作ろうとしていて、それはやはり先ほども下町ならではの共助みたいな話があったけれども、そういったところを生かして、その京島の街全体を、福祉施設のように、実際には施設の場所は用意していて、種別忘れたけども通所の生活介護を目指していると思うが、町全体で、みんなで一緒に見守っていこうみたいな、そういうモデルを作りたいということで今動いていて、実際にそれが本当にできるかどうかはわからない段階だが、ただやっぱり京島、下町の中では何かそういった文化的なところから新しい福祉を作ることは挑戦としてある。あと最後 4 番の方に福祉と教育の融合って書いていて、これは次回話した方がいいと思うが、教育の現場が福祉、特に発達障害とかに対しての知識や理解がなさすぎる。今話をしたが、これが不登校などを産んでいる問題にも繋がっていると思っている。やはりそういった教育と福祉をこれからどう融合させるかということは重要。最後のページにデンマークのペタゴーとあるけども、デンマークとかだと学校の先生というのはもう勉強を教えることしかしない。ペタゴーみたいな福祉的な視点の人が入っていて、子どもに何か問題があるときにどうやってそれをうまく教育に繋げていくかみたいなことを支援する別の役割がある。日本の場合は、そ

	れを担任の先生とかが1人で抱えている。社会的福祉的なことまで抱えていると、先生の負担はどんどん大きくなるし、担任だけでなくて副担任つけてみたいなことになっていると思うが、そこら辺をもっと福祉職の人間とうまく融合させることができれば、全然違う世界ができるのではないかなと思っている。例えば、そういう問題をケーススタディにして、教育関係者と福祉関係者が一緒に話をするだけでも、多分全然違う解決策が見えてくるのではと思っていて、何かそういうことができたらいい。 （鈴木委員） 　先ほど平林委員がおっしゃったような支援者への支援、保護者を含めて、やはり子どもを支える人たちへの支援というのはすごく大事だと思っていて、リフレッシュできる場と機会があるといいなと思う。成育医療センターにカルガモの家みたいなのがあるように、やはり重度の子どもたちを一晩預かって、親は自由にというような機会があるといいのと、それから保育を専門とすると、どうしても生まれる前から、障害の子どもたちというのはわかっている場合もあり、あるいはものすごく小さく生まれてしまうというようなこともあるので、そういう生まれる前からのケア、継続的なケアがすごく大事だというふうに思う。大学でも合理的配慮というのは当たり前のようになってきている時代で、発達障害の子は増え続けているので、そういう子どもたちに対しての例えば先ほど駒村委員がおっしゃったように、その床屋さんであったりとか歯医者さんであったりとか、例えば山室先生に三師会みたいなところで研修として、そういう子どもたちを受けるときにどうするのかというようなことができたらいいのではないかなというふうに思った。 　次の話題に移らせていただく。 　最後は総論になる。地域福祉についてお願いしたい。 （山口委員） 　資料6の2番と3番に書いていて、前回も話したが、例えば高齢者とか障害者とか、あと小さい子どもがいる家庭とかは、移動に困難がある方がたくさんいると思っていて、結構そういう話を耳にする機会が多い。近ければ行くが、自転車で 10分 15 分だとなかなか行けないみたいな話があって、そうすると批判的になってしまうが、大きな施設を一つ作るよりも、近くの施設の方がやはり市民のためになるのではないかなと思っているので、小さなそういう居場所とか窓口みたいなものをどう増やしていくかということを考えた方がいいのではないかと個人的に思う。 （山室委員） 　地域福祉というのは高齢者についてはおそらく包括がやってくれているが、障害者は各地域で見てはいないのではと思っていて、できたら包括で障害者を含めていろいろ支援していくことがいいのではないかと思う。 （平林委員） 　まず住民の方たちとかが町会活動、地域活動に参加できるような仕組みが醸成さ

	れてくればいい。 　あと何かあったときに支援者同士が繋がれるようなネットワーク、地域のネットワークもそうだが、支援者間のネットワークがしっかりと構築されてくると、複合的な課題とかにも対応できると思う。 　あとは、先ほどいろんな意識の醸成の話があったが、やはり福祉教育的な視点でそういうところを学んでいけるような場が地域の中に自然に生まれてくるといいと思っている。 （星野委員） 　老人クラブでは、特に１人ぼっちの老人をなくそうということを１つの大きな柱としている。だから必ず年に２・３回訪問している。 　見守りが本当大事。墨田区は幸いにして見守り支援のような人がいて、そこといかに老人クラブが連携してやるかということが本当に大事だと思っている。 　自分が買い物をするためにどこかに出かけたときなど、日常生活の中で、変化があったら必ず責任者の方に伝えるということにしている。 　たまたまいい事例があった。最近あの人見ないが、どうなっているだろうかということで相談が入った。そこで仲のいい人に連絡してもらったら、階段登るときに滑って骨折してしまっていて電話に出られなかったとのことで、早速連携して見守りの対応をしてもらうというのがあった。 　会員の中でも、話がかみ合わないと認知症になり始めたのではないかと疑う。親御さんと外に出たがらない子が１人いるとなると、家族の中で、親が認知症になっているというのはどれだけ認知されているのか。そういう対応をしているのか、これが全然わからない。 　定期的に訪問する。やはり老人クラブの存在価値はここにあるというようなことで、今やっているが、そういう意味で地域を支えるというのはやはり大事。 （庄司委員） 　障害者も高齢者もそれ以外でも必ずどの家庭にも問題があると思う。そういうときに、本当にお話するだけでも気が楽になったり、プラットフォーム的なところがあって何でも話せるようなところがあるといい。墨田は得意、おせっかいが多くて、誰とでも仲良くできるという面が生きると思うので、そういうところを生かしていってもらいたいと思う。 （鎌形委員） 　今、本所地域プラザに関わっている。経済的に余裕があるときの最初の計画時点では区内に地域プラザを６か所つくるという予定だったが、今は南北に１つずつできている。 　それこそ本当にポイント的になるが、本所地域プラザというのは本所１丁目にある。同愛の調査によると、本所１丁目の高齢者が一番元気。というのは行って気軽に喋ったり、利用したり、涼み処にもなっている。集まるところがあるというのは、やはり効果的と思っているので、立派な建物でなくていいから、そういうところをたくさん作る。民生委員の地区は７つに分かれているので、少なくとも７ヶ所ぐら

	いは必要。本当にひと部屋の小さいところでもいいので作っていって、区が建物を作るのではなくて、場所を作る。プラットフォームも今ようやく５つぐらいになったと思うが、どんどんそういう感じで無理なく、ちょっとひと部屋を借りるような感覚で増やしていく。用がなくても気楽に行けるところを作らないといけないなと思う。 　このあいだボランティアフォーラムの時に出たが、特に定年後の男性は人と交わることが不得意。プラットフォームに行くと、空いている時は社協の職員が１人でパソコンをしている一方、例えば折り紙のイベントをしているとたくさん人がいる。喋らなくても入りやすいような対応が必要。例えば大人の人気ある絵本があると思うが、それを何冊か入口の辺に置いておいて、あなたはどの絵本が好きかということをアンケート用紙に書いてもらうだけで、その場にいられるのではないかとの提案が出た。そうすれば社協の職員ともだんだんと顔なじみになる。そういう感じで、男性の高齢者の居場所を作るようにいろいろ工夫をしないといけない。孤立して亡くなるのは男性がほとんど。女性はどこかに行っていることが多いので、この間の体操も休みで来なかったとなると、月２回であれば、ひと月以内に誰かが行ってみるとか、包括が行ってみることもあるので、そういう意味では女性の方が救いやすい。人的な手当をしなければいけないので、ただでできるわけではないが、少し顔を出せる居場所を区が先頭に立って作っていただきたい。 　先ほど高齢者の多様性の話があったが、私の周りは 80 代の人が 90 代から 100 近い人の面倒を見ているサロンなどがある。一人ひとりすごく違いがあると思う。元気な方もいるので、そういう場所がたくさんあると手伝ってくれる方も割といるのかなというふうに期待している。先ほども話ででたが、おせっかいが好きというようなことでやっていくのが地域にとってはいいかなと思う。 （駒村委員） 　千葉大の近藤先生が男性を引っ張り出す方法を研究しているので、ぜひ話を聞いてほしい。要するに居場所があるだけでは男性は動かない。出番があれば、本気で活動を始めるということがわかっている。これは事例がいくつもある。 　生活困窮者自立支援の法律の話だが、この制度をつくる時から関わっていたが、この名前はあまりよくない。生活困窮者はいかにも経済的困窮者という感じだが、本当は生活上のあらゆる困りごとを支えるというので、ゴミ屋敷などから社会的孤立で将来、貧困の危機のある人を支えるというのが目的の法律。経済的貧困のみを助けるような記述が法律の部分にまだ残っており、改正すべきではないかという議論がある。 　この中でも子どもの学習支援は、子どもの居場所、子ども貧困世帯を抱えて、子どもの環境からちゃんとやらないといけないはずだが、塾代や家庭教師代を補助する程度だと、この問題は解消できない。ここもどういうところにおまかせするか自治体の目利き力がすごく重要になってくると思う。 　墨田はさっき見た単独世代の高齢者で貸家に住んでいる方が非常に多い。相対比較してないが、この人たちがまさに問題になってくる。住宅セーフティネット、一体的に法律の見直しがされているので、墨田はこの貸家に住む高齢者の問題は必ず大きな問題になってくると思うので、対応が必要な人が出てくると思う。

	先ほど皆さんの方から「ごちゃまぜ」の話が出てきている。障害者・高齢者・児童、この三つの福祉分野を分けて議論をして、整備なんかやっているが、本来そんなことやっている余裕はもうないはず。金沢でやっている Share 金沢を運営する佛子園という社会福祉法人が、小松市三草二木 西圓寺でやっているごちゃまぜの取り組みは面白かった。潰れたお寺をそのまま居抜きして、本堂を大人食堂にした。子ども食堂じゃなく大人食堂で、子どもでも大人でも誰でも食べに、飲みに来ていいとその町の集いの場にされた。その隣では放課後クラブあって、障害者の見守りをやって、高齢者の居場所を作っている。地域住民が大人食堂みたいなところにパーティーでも誕生日でも飲みに来るし、さらにその佛子園さんは境内で、温泉を掘り当て、お風呂屋もやり始めた。そこで地域住民がお風呂に来て、帰りはみんなでわいわいやって、子どもや障害者の見守りもやって帰っていくと、そういうまさにごちゃまぜを実現している。京島モデルがどういうごちゃまぜを作っているかはぜひ今度調べて教えていただきたいと思うが、その時に一番邪魔をするのが行政。ここの予算は障害者用の廊下分で、この予算は高齢者用廊下分で、ここは子ども用の廊下分と、補助するときに費目ごとに制限かけてしまう。これはもう廊下 3 本作るのかみたいな話になるので、そういう余計なことは区がやってるか、都がやってるか、いろいろあるけれども、ごちゃまぜというのはこれから特に墨田ではいけると思う。 あとは、セルフネグレクトの問題。行政嫌いな人がいる。絶対行政と関わりたくない。セルフネグレクトで自分のことはもうほっといてくれと。私はこの仕事柄、こういう方たちとお話をすることもあるが、なかなか衝撃的で、我々届かないところ。こういう活動に対しても、どうおせっかいするかは、なかなか難しいが、生活困窮はこういう部分も守備範囲になる。行政で届かない部分を社会福祉法人でやるのか、どこでやるのかという話になると思うが、少し頭の中に入れておかなければいけないと思う。 （角山委員） 先ほど老人会の役割という話が出た。前にもお話したかと思うが、大学が足立区にあるので、12 年ぐらい足立区孤立ゼロプロジェクトに学識経験者として携わっていた。やはり足立区も非常に高齢者が多い。見守り隊を作るけれども、見守っているのが高齢者。高齢者が高齢者を見守るということで、ずっとやっていて何とかしないと、後が続かなくなるという話も出ているが、なかなか難しい。 私の勤めていた大学では、地域の子どもたちを対象にした未来祭というお祭りを年に 1 回行っている。10 年以上続いていて、地域に根ざしてくるとやっぱり毎年 600 人～700 人の、お子さん連れのご家族が地域から来てくださる。それが大きな広がりになっていて、そこから育っていった子どもたちが、今度はそういう地域活動に自分でも少し参加してみようというような形で広がりが出ていく。そういう若い人たちに対する働きかけというのが、これから非常に重要になってくると思う。 もう一つは、足立区の場合には国立と放送大学含めて六つ大学があるが、その大学の学生たちが年に 1 回か 2 回集まって意見交換をしている。地域で自分たちの活動ができないかということで、そういう動きがだんだん広がってきている。やはり活性化ということでは非常に重要なことだと思う。

	私の住んでいるところに「老人生きがいの家」というのがある。老人は生きがいがないのか。わざわざ作ってやらなければいけないのかと、これちょっとまずいのではないか。先ほどのサード・エイジの話ではないが、やはり年齢関係なく、いろいろな形で集える、あるいは交流ができる生活の場を我々自身が考えていく必要があるというふうに、いつも思っている。 （鈴木委員） 今回の福祉のことで、地元でリサーチをかけたところ、すみだ保健子育て総合センターに鐘ヶ淵からどう行くのみたいな不満は確かにあった。一方で隅田小学校の後で体操をやっていたり、社協が入ってたりとかすごく高齢者の方が集まっていて人気がある。そういうようなことを考えると、様々な意見を頂戴したが、本当に場と出番が必要と思い、その場と出番があることが地域福祉に繋がっていくのとすごく今日は感じた。 本日の議論を踏まえた上で、今度は事務局の方で印象に残ったキーワードということで説明をしていただきたいと思う。あわせて次回の案内もお願いしたい。 （事務局） 本当に様々にご意見をいただいて、次回以降、今回の議論を踏まえて、まとめというような形で 10 年後の将来像を作っていくということをさせていただく。 それに向けて、本日の印象に残った意見、こういったことをしっかりと拾っていきたいと思った部分をご紹介させていただく。その他にも、議事録をきちんと作成した上で改めて確認して、整理していくが、まずはというところでお話しさせていただく。 最初に高齢者福祉のお話をさせていただく中では、角山委員からいただいた資料を基にした形の中でのサード・エイジのところをいかに伸ばしていくか、また入口というようなところの中でのサード・エイジ大学の話もあった。受け手だけではなく担い手を高齢者自身が担っていくというようなお話であったり、実は認知症というのも、普段から社会活動していると大丈夫、だけど孤独になってしまうと危ないというのは駒村委員からお話があって、最後に星野委員の方から 1 人ぼっちの老人をなくそうと、この言葉はキャッチフレーズ的にも、すごくいい言葉と思った。 それはもしかすると老人という言葉に限らず、1 人ぼっちをなくそうという視点で、障害の方とかも含めて考えていかなければいけないと感じたところ。 またサード・エイジなどの話に戻る際には表現の仕方は難しいけれども、山室委員の方からお話があった、元気なうちにフォース・エイジをしっかり考えていくというところを、しっかりと理解をしていただく必要があると感じた。 また高齢者福祉だけでなく障害者福祉の方でも話が出てきた、情報発信のあり方について、ポイントかと思っているが、これから社会がデジタル化していく中で、どのように伝えるべきところを伝えていくかというところの重要性というご指摘があったと思っている。 また障害者福祉の中では、全体的な議論を通じて、やはり理解をいかに広げていくか、それは当事者の方々でしか、なかなか理解ができていない部分、支援者にとってもおそらく理解が十分でなかったり、当事者間でも先ほどお話あったように、

	自分の障害に関して非常に理解があるけれども、違う障害のところに対しては理解が実はなかったりするというようなところも含めて、いかにしてその理解を深めていくか、そこの中では、ごちゃまぜという非常に重要なキーワードをいただいた。こういったところをしっかりと整理をしていく必要があると思った。 　表現として高齢者福祉の中で一番面白かったのは、主観年齢を若くすること。主観年齢が若いまちを目指すというのはどうだろうかという提案は非常になかなか今までないような視点だったと思うので、その未来を描いていく上ではとても面白い視点だったのではないかなと思ったところ。 　最後の地域福祉の中では、用がなくても行ける場所、サードプレイスのようなそういった緩やかに集える場所、それは箱ということではなく、場をつくるというような言葉もあった。 　私もなるほどと思ったのが男性を引っ張り出すには出番が必要ということ。 　そして何気に大事と思ったのは、障害になるのは行政、実はこれがすごく大事な視点と思っていて、個人情報のところに関しては、やはり法律というのがある中で、それを遵守しなければならない行政組織として、明確な壁があるというのはどうしても事実。でも、その中で安心して暮らし続けられる地域、元気に暮らし続けられる地域、生き生きと暮らし続けられる地域のためには、行政が全部やろうとすると、壁に阻まれてしまうから、ゆるやかに、行政が行政以外の組織と繋がりながら地域を作っていくことが非常に重要なのではないかということを感じた。 　少し取り留めもないところであるが、私の方で感じたところをご紹介した。改めて、次回、将来像の案をまとめた上でご提示をさせていただきたい。 （平林委員） 　一点だけ要望だが、こういう地域の福祉関係を冊子とかにまとめるときに、どうしても高齢者とか障害者の方たちとか、何かどうしても偏りがあるような形になってしまうので、ぜひ若い人たちにも関係があるというようなワード、言葉選びをぜひしていただきたい。例えば生きがいみたいな言葉だとどうしても高齢者のイメージ。若者とかだとやりがいとかになる。だからそういう言葉選び、若い人たちだとそういう何かの機会があれば参加したりするので、そういうところでぜひ福祉の落とし穴に落ちないような表現をお願いしたい。 （事務局） 　検討していく。その上でまたご意見いただければと思う。 　次回は 9 月 27 日の午後 7 時から先月と同じすみだリバーサイドホールで開催する。 　また次回、外部の方に講演をお願いしようと思っている。次回が子育て、学校教育というテーマでやっていく中で、区内の NPO 団体で、チャンスフォーチルドレンという団体の代表の今井様に講演をしていただけるような調整を今しているところ。内容等を少し詰めさせていただいた上で改めてご案内をさせていただければと思っている。 　事務局からは以上。

	（鈴木委員） 皆様のご協力のおかげで本当に円滑な運営ができた。 以上で第２回の部会を終了する。 解散
所　　管　　課	企画経営室政策担当（内線３７２２）